

私の障害は神様からのプレゼント

郡 美矢

牧師・国際手話通訳者

構成○福永妙子 撮影○本社写真部

美矢さんは、日本では数少ない者たちの牧師だ。教会では、手話を聖書の言葉を聞き、集う人々の悩みを受け止める。その半生は、自身で海外に渡り、働き、学ぶなど、常にチャレンジの連続。「ろう者だからといって、できないことはない」という、その前向きな生き方のベースとなっているものは――

◆◆◆
おおらかな父と育まれ
厳しい母と育まれ
おおらかな父と育まれ
厳しい母と育まれ

小さい頃から、おてんばで向こう見ず、失敗してもあっけらかん……そんな子どもでした。今もまったく変わっていない。(笑)
生まれたときから耳が聞こえなかつたので、幼い頃は、ろうであるこ



とを特に意識することはなかったですね。私の家族は、父がろう者で、母は8歳のときの病気が原因で耳が聞こえなくなりました。私は3人きょうだいの末っ子。1歳違いの次兄もうろ者で、4歳上の長兄だけは耳が聞こえる聴者です。家族間の会話は手話で、しゃれや冗談を言い合つては笑う、そんな家庭でした。

小学校に上がる頃、一緒にろう学校に通っていた次兄が、「バカにされるから」と、通学のバスの中で手話で話すのをイヤがつたことがありました。それからですね、「ろうつて何?」と思うようになつたのは、とほいえ、これまでの人生で、私は自分を不幸だと思ったことは一度ありません。これは、ろうであることによつた劣等感をもたず、むしろ誇りをもつて両親の姿を見ていたせいでしょう。

この一人のバランスがよかつたのだと思います。

嫌い。加えて、両親からは「何ごとも諦めないこと」と言われて育ちましたから、自分でやりたいと思えばためらうことなくトライしてきました。ろう学校から普通の公立小学校に転校したときもそ

実家は理容店で、両親は共働き。

父は朗らかで明るく、周囲の方たちからもとても好かれていました。一方、母は教育熱心で、私が怠けたりすると叱りますが、母自身も、とてもらつかりしている人でした。たとえ、長兄が風邪をひいて学校を休まなければいけなくなつたときでも、学校への連絡を聽者である長兄に頼んだり、通訳してもらつたりといふことはしない。自転車に乗り、自分で直接、学校まで伝えて行くのです。

「耳が聞こえないからしようがない」ということを、母は一度も口にしたこと�이ありません。むしろ、「ろう者だからといって、できないことはほとんどない」と、いつも言っていました。そんな母の厳しさと、失敗しても「大丈夫、また次がある」と励ましてくれる父のおおらかさ――この一人のバランスがよかつたのだと思います。

◆◆◆
やつてみなければ
わからない

高校卒業後、歯科技工士の資格を取り、外国で働きたいという夢を実現すべく就活に奔走。22歳のときにカナダの歯科ラボ(歯科技工所)で働くことになる。(このときに貯めたお金でアメリカの大学・大学院に進学。寮生活を送りながら、神学、ろう教育を学び、卒業後、アメリカで牧師

になりたいと思えばためらうことなくトライしてきました。ろう学校に転校したときもそ

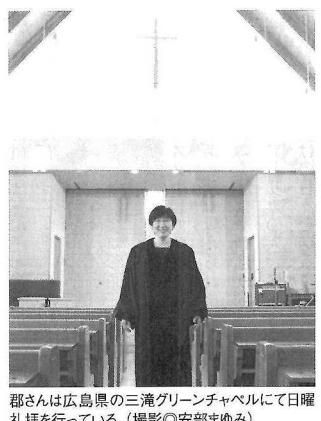
うです。「前例がないし、無理」とはねつけられながらも、母と私は2年間、学校と交渉を続けました。

「挫折しても、こちらは責任をとらない」という先生に「全部自分で責任をもします」と母。その言葉に私も「何があつても自分で引き受けなきや」と心に誓つたのです。そうして小学校6年生のとき、ようやく普通校への転校がかないました。

中学、高校も普通校に進みました。高校では男子しかなかつた柔道部に入部。初の女子部員となり、県大会優勝、全国大会にも出場することができました。私は何でも「初」というのが大好きなんです。人と同じことをするのがイヤで、違うことを探せばいいというのが私の考え方です。そうして資格を取り、カナダでの仕事を得ました。壁にぶつかつたら、そこで立ち止まらず、別の道を探せばいいというのが私の考え方です。どうして資格を取り、カナダになる道を選びました。壁にぶつかつても私は、あれこれ考えるよりはまず行動。「なんとかなる」「やつてみないとわからない」と思つています。徳島出身だからではないですが、「同じ阿呆なら踊らんや損損」です。

カナダの歯科ラボでは最初は身振り手振りのジェスチャー、そして英語の筆談で同僚たちと会話しました。私はろう者なので、英語は自分で覚えます。日々暮らしていると、街を歩けば、イヤでも英語の文字に接します。そうしたなかで、少しづつ英語に慣れていました。あとは

こおりみや 1970年徳島県生まれ。高校卒業後、歯科技工士の資格を取りカナダの歯科技工所に勤務。その後渡米。2006年に帰国後は、兵庫県の但馬神愛キリスト教会・広島県の三滝グリーンチャペルで牧師をつとめながら、日本では数少ない国際手話通訳者としても活躍している。初の著書『あなたは見えないところで愛されている』を上梓



郡さんは広島県の三滝グリーンチャペルにて日曜礼拝を行っている(撮影○安部まゆみ)

テレビです。番組はほとんどと言つていいくほど、英語の字幕が付いているので、役立ちました。

手話は、ろう者の集まりに参加、そこで友だちがたくさんできる中で現地の手話をマスターしていきました。手話はわりあい早く覚えられましたけど、英語の文法はやっぱり大変で。その後、アメリカの大学に入り直し、英語漬けの日々を送るようになってからは、上達のスピードもぐんと上がった気がします。

アメリカの大学は宿題やレポートが多く、遊ぶ暇はありません。それでもアメリカ人の友だちは、成績がA B C D の4段階評価だとすれば、C以上を取ればいいじゃないかとう考へで、適当なところで勉強を切り上げる。でも私の場合、中途半端で投げ出すのはイヤで、最後までやり通すタイプなので、目指すはAかBのみ。テスト前は徹夜が当たり前、いわゆる『ガリ勉』でした。

勉強漬けの日々の中、たまににぎった「遊びたい」欲求は、夏休みや冬休みに発散です。何しろ、夏休みが4ヵ月もあるのですから。

休みの半分は、参加していたらうクリスチヤン劇団のメンバーとして世界各地をまわりました。国の言語がそれぞれ違うように、手話も共通ではありません。互いの手話を知ら

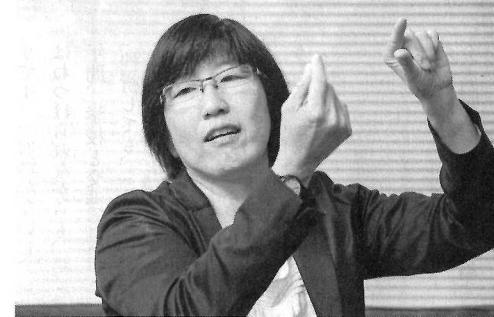
ないろう者は表情と手話のほかに雰囲気、感覚というセンスで、個人差はありますがけつこう通じ合っています。表情豊かに、身振り手振りの大好きなジェスチャーで演じるので、コメディだと、言葉が通じなくても、みなさん、笑ってくれます。私が演じるのはなぜかいつも悪役。面白い顔をしているからでしょう。(笑)

夏休みの残り半分は、一人でヨーロッパをはじめ、世界の国々をバツクパックでまわりました。ろう者、聴者を問わず、各国で出会ったくさんの友だちとは、今もつながっていて、フェイスブックで交流しています。

◆◆◆ ろう者がろう者に向けて伝えること

アメリカでは、犯罪が多発する貧困地域の教会で牧師として働き、黒人ろう者に演劇を教えたりもした。郡さんは、そもそもなぜ牧師の仕事を選んだのだろう。

なぜ牧師になつたのか――? うーん、長い話ですが、できるだけ短く(笑)。私の両親はクリスチヤンで、父は、絵本を読み聞かせるように、私たち子どもに聖書の物語を手話で話してくれました。それがとても上手で、すごく楽しかったんですね。



郡さんの手話は非常に表現が豊かだ。巧みな手指の動き、感情をあらわす顔の表情など体全体を使って表現する

ところが多くのろう者の人たち、聖書は分厚くて読みづらく、難しいと言ふ。実は、聖書の中にはヒーローも出てくるし、面白い話がたくさんあります。何より、生きていくうえで大切なことが書かれています。

ただ、それを伝える人がいない。アメリカのろう劇団で聖書の物語をやると、観た人は、「面白い」「よくわかった」「自分もやりたい」と、とても興味をもつてくれました。そんな様子を見て、ろう者がろう者に向けて伝えること、さらに言えば、手話を柱とした、ろう教育そのものの重要性をあらためて感じました。

国との枠を超えて、そうした活動についてアフリカの貧しい国のろう学校でろう教育の分野に関わる仕事をしたいとか。そのため牧師の資格を取り、経験も積んで……。そういううするうち、「日本ではろうの牧師がない。帰ってきて」といわれて牧師になり、今に至つたわけです。

ろう教育について言うと、日本では口の動きから音を読み取る「口話法」が重視されてきました。聞こえないでも話せるようになつてほしい、社会に出たときに少しでも聴者と同じように、ということなのでしょう。けれど、聴者が音声によって自然に言葉を覚えるように、ろう者にと

◆◆◆ ろうだとわかると逃げる人も……

つては、自分で見て覚える手話こそが自然に獲得した言葉。それ自体、独自の言語であり、文化なのです。日本語のほかにも英語やフランス語といつた言語がある。それと同じです。

不便を感じることはあります。乗つていた電車が急にストップしたときには、車内アナウンスが聞こえないのでは、何が起こったかわからず、どうすればいいのか戸惑います。スーパーのレジで、マスクをしている店員さんだと、「袋はご入り用ですか?」「お箸はおつけしますか?」と言われても、話しかけられていること 자체に気づかない。道を尋ねるときも大変です。こちらがろう者だとわかると、逃げる人もいて。どう対応して

いいか、わからないのでしょうか。助かるのは、紙に書いてくれることですが、ともかく、避けずに、普通に接してくれるのがいちばんです。

日本でのろう者に対する意識は、こんなエピソードに象徴されます。生まれた赤ちゃんがろうであることがわかると、お医者さんはこう言います。「手術で人工内耳を入れると、聞こえるようになるかもしません」。聴者に合わせる発想ですね。それが、たとえばスウェーデンの場合はこうです。生まれた赤ちゃんがろうだとわかると、親はショックを受けます。それは日本と同じです。でも、お医者さんの言葉は違う。

「おめでとう。これであなたの家庭には一つめの言語、一つめの文化が生まれたことになる。特別なことですよ」と、お嬢さんと一緒に手話を教えてくれた。『LOVE YOU』をあらわす手話である。さて、日本

「おめでとう。これであなたの家庭には一つめの言語、特別なことですよ」

ところが多くのろう者の人たち、聖書は分厚くて読みづらく、難しいと言ふ。実は、聖書の中にはヒーローも出てくるし、面白い話がたくさんあります。何より、生きていくうえで大切なことが書かれています。

だから、それを伝える人がいない。アメリカのろう劇団で聖書の物語をやると、観た人は、「面白い」「よくわかった」「自分もやりたい」と、とても興味をもつてくれました。そんな様子を見て、ろう者がろう者に向けて伝えること、さらに言えば、手話を柱とした、ろう教育そのものの重要性をあらためて感じました。

国との枠を超えて、そうした活動についてアフリカの貧しい国のろう学校でろう教育の分野に関わる仕事をしたいとか。そのため牧師の資格を取り、経験も積んで……。そういううするうち、「日本ではろうの牧師がない。帰ってきて」といわれて牧師になり、今に至つたわけです。

ろう教育について言うと、日本では口の動きから音を読み取る「口話法」が重視されてきました。聞こえないでも話せるようになつてほしい、社会に出たときに少しでも聴者と同じように、ということなのでしょう。

けれど、聴者が音声によって自然に言葉を覚えるように、ろう者にと